

A c a n t h u s

第11号

平成21年3月17日
茨城県立土浦第一高等学校進修同窓会
旧本館活用委員会



平成20年度 卒業証書授与式 ↑

去る3月2日、卒業式(全日制)が挙行され、3年生321名が本校を巣立ちました(定時制卒業式は13日・卒業生24名)。

108年前の明治35年3月28日に、土浦中学校第1回卒業生32名を送り出して以来、卒業生総数は29,892名となりました。卒業生が3万の大台目前に至ったこの機会に、土浦一高の前身、土浦中学校の生い立ちと草創期の様子を紹介しましょう。下の写真は明治期の亀城の一角です。櫓門の左後方の建物は新治郡役所です。ここで土浦一高は、茨城県立尋常中学校土浦分校としてその産声をあげたのです。



亀城櫓門と
新治郡役所 →



← 立田町に完成した新校舎
(現土浦二高旧校舎)
(昭和44年取り壊された)

教職員4名で開校

明治30年3月4日の茨城県知事の告示で、茨城県立尋常中学校土浦分校は、下妻分校と共に設置されることとなった。これに基づき、7日に郡役所で事務を開始した。14・15日の両日、入学志願者193名に対し、土浦高等尋常小学校校舎を借りて選抜試験を行い、18日、80名に入学を許可し、5日後の22日に授業を開始した。大変慌ただしい開校であった。しかも生徒を収容し授業を行うべき校舎を持たずにである。

教職員は、分校主任(倫理・英語・国語担当)と体操担当・算術担当の教師3名、それに書記1名の計4名であった。同年8月に博物担当の教師が赴任して加わったが、僅か5名の教職員と80名の生徒でスタートしたのである。

当時の授業内容は、不明な点が多いが英語・作文・国文・漢文・算術などで、体操は兵式体操、3年からは銃を執り、発火演習(軍事教練)なども行った。開校直後から、生徒の自主的活動が活発に行われ、生徒間に幾つかの親睦会が生まれ、正科以外の身体精神の自己啓発の場へと発展した。同年12月には統合して進修会を発足させ、以後、学校生活の核としてその活動内容を拡充していった。機関誌「進修」の臨時号「創立十周年記念録」(明治40年11月刊)で、『正科を筋骨とすれば、この会は血脈である』と評価している。

さまよえる土浦分校

独自の校舎が無いまま開校した土浦分校は、郡役所二階で授業を開始したが、2ヶ月後には土浦尋常小学校校舎の一部を借用して移転した。翌年4月には、一年生は小学校校舎、二年生は内西町の民家(現関東つくば銀行駐車場)に移り仮校舎とした。32年度になると、一年甲乙両組は小学校女子部校舎内に、丙組は郡役所の控室に収容されたが、9月には一年生全員が内西町の工場跡地の建物に移るといふように、土浦分校は教場を求めて転々と彷徨った。さらにこの年の秋には大雨により霞ヶ浦が氾濫。内西町の仮校舎は浸水し、10日間も臨時休業に追い込まれるなど苦勞の連続であった。

土浦分校の校舎建設が進まず、仮住まいを繰り返していた背景には、当時の土浦町と真鍋町との間における中学校誘致を巡る激しい争いと県議会議決の二転三転があった。

立田に待望の校舎完成

県議会は最終的に真鍋台建設を可決したが、県当局はこの建議を採用せず、校地を土浦町立田に決定した。そして明治

32年12月、ようやく新校舎は完成した。洋風二階建て本館1棟と生徒控所兼雨天体操場1棟からなり、本館には8教室と二階中央に講堂が設けられていた。

分校創設以来、学び舎が定まらず、三ヶ所に分設された教場で不便な学校生活を余儀なくされていた生徒たちは、やっと安住の地にたどり着いた。同年12月21日、広大な立田校舎に移転し、一同歓喜に浸った。その感動は「進修」創刊号(明治33年1月刊)に詠い上げられている。

『立田の臈間、数字巍然として高く雲間に聳ゆるもの、是れなむ我が茨城県中土浦分校なる。長の年月待ちに待ちたる新しの学び舎なる。』

しかし、結果的には、ここも数年間の仮住まいでしかなかった。現在の真鍋台校舎が完成(明治37年12月)し、移転(明治38年3月)するまで、なおしばらく流離いは続いたのである。

「進修百年」(創立百周年記念誌・平成9年11月1日刊)によれば、土浦中学校の基礎は、図書閲覧室の開設、運動場の整備、校訓の制定、寄宿舎の建設などが進められた明治40年代に確立されたこと記している。これに先立つ明治30年代はまさに完全な無からの出発で、生みの苦しみと闘う千辛万苦の10年間であった。

この先輩たちの学校創設に注いだ努力と情熱によって形成された基盤と理念こそが、その後の土浦中学校・土浦一高を培ったと言えよう。

三万に及ぶ卒業生たちが築き上げてきた伝統と校風、百余年の風雪に耐えて聳え立つ文化財の旧本館、これらは何ものにも代えがたい本校の有形・無形の遺産である。君達はこの恩恵に浴しながら、ここで学ぶことができる幸運を噛み締めると共に、この遺産の価値をさらに高めて、土浦一高の新たなビジョンを描いて欲しい。